

あいさつに代えて — 人文的ボーダー学の試み —



木村 崇

去る5月25日の特定非営利法人国境地域研究センター総会で、藪野祐三さんの後任理事長に選任されました木村崇です。ボーダー学とボーダーツーリズムに魅せられて、この10数年間副理事長の岩下明裕北大教授と歩を合わせて活動に参加してきました。型どおりの挨拶は嫌いな質なので、かわりにボーダー学を人文系の分野にも押し広げることが可能かどうかをたしかめたいという日頃の思いを検証してみることにしました。テーマは最近日本社会で深刻な問題になっている「ひきこもり」です。

私はいつも、謝罪会見でしばしば耳にする「世間をお騒がせして申し訳ありません」という決まり文句や、「内輪の恥を晒したくなかった」という弁明が、どうにも気になって仕方ありませんでした。どうやら日本社会には「世間」と「内輪」の間に目に見えない境界があって、それは価値判断にかかわる牢固たる優劣・善悪を生み出す高低差のある境目になっているようです。「なぜそうなのか」はとりあえず問わないでおきましょう。さて「ひきこもり」ですが、この現象は「内輪」の構成員の一人がその内輪にさらに境界を設け、そこに「座敷牢」を、いやより正確には「座敷砦」を設けてその中に緊急避難する行為だといえるでしょう。しかし脱出への契機を放棄したままこのような行為をはじめてしまえば、「避難」とい目的からもますます遠ざかってゆかざるをえません。「砦」の中では葛藤が増幅してゆくばかりです。それはおそらく耐えがたい心理的圧迫の連続でしょう。そしてそのことがますます砦の外へ出ようとする意欲を殺いでゆき、閉じた回路内での思考の空回りが続くことになるのです。

ロシアの作家チェーホフは今から130年前、『賭け』という短編を發表しました。ある地方都市で銀行家として成功した40歳の富豪の邸宅で催された夜会で、「死刑と終身禁固刑ではどちらが非人道的か」という、ある種極めて知的な議論が起こったというのが小説の発端です。キリスト教的倫理観から「死刑否定論」をとる大多数の出席者に対して、銀行家は、死刑は直ぐ執行されるが終身刑はきわめて緩慢にそれが執行されるわけで、刑吏の行為としてはむしろこちらの方が非人間的だと主張します。そこへ25歳ぐらいの法科生らしい若者が、生命剥奪という点ではどちらも不道徳だけれど、自分が受け入れるとすれば、終身刑の方だといったため、とんでもない「賭け」が成立してしまいます。この辺がいかにもロシア的なところですが、銀行家が「君には拘禁状態を5年も我慢できないだろう」ときめつけたのに対し、法科生は「15

年は堪えてみせましょう」と受けて賭けを提案したのです。もしかれが全青春を犠牲にして15年堪えきったなら、銀行家は2百万ルーブルを支払うというのがこの賭けの条件でした。

慷慨紹介は興を殺いでしまうでしょうから、ここで止めにします。チェーホフはこのあと「引きこもり」状況をこのうえなくリアルに描いてみせます。もちろん当時のロシア社会に、かりに「世間」と「内輪」の切れ目があったとしても、日本のそれとは単純に同列視できないのは自明です。ただ、銀行家の豪壮な私宅の一面にしつらえられた「牢獄」の内部では、読書も飲酒も、ピアノ演奏も、牢獄内部で行われる限り何でも自由という設定になっています。これは現代日本の「引きこもり」が多くの場合、ネットで情報交換をしたりゲームに打ち興じたり、テレビを見たり、音楽を聴いたり楽器を演奏したり、さらに身内にねだればそれなりにおいしい食事も可能だという点では、同じ条件だと見做してかまわないでしょう。でもそれは安定した避難場所を約束するものではけっしてありません。私が先の段落で「おそらく耐えがたい心理的圧迫の連続でしょう」と推論したのは、この小説を読んでいたからです。

明治時代に大日本国憲法が作られ、しばらくして旧民法が制定されますと、日本国民は二つの強靱な道義的な型枠に拘束されました。ひとつ目は「万世一系」の国体を堅持しなければならぬ皇国臣民としての自分、ふたつ目は家制度にしばられた存在としての自分です。封建制度とは違って国家の中に大きな公的空間は拓がりましたが、その中で自立した個人として生きてゆくことはきわめて困難でした。私は日本の近代化のこの新たな状況が、いつのまにか「世間」と「内輪」の間の超えがたい落差のある間隙を作り上げたのではないかと考えています。ところで、この世間と内輪の間の境界は一本の線ではなく、幾つもの同心円から波紋のように重なり拓がってゆく、とらえどころのないものになっているのです。たとえば会社です。「ウチの会社」というように、自分が所属する会社はその外部に対しては「身内」となります。外国に対して日本はいつの間にかその中にいるものはすべて「身内」として扱われ、内部で通用しているとされる暗黙のシキタリには無条件で従うべきだという空気が醸成されています。その「空気を読めない」者や、「上位者」の意向を「忖度」出来ない者はイジメにあっても仕方ありません。こうして「自己責任論」が大手を振ってまかり通るわけです。引きこもりに状況の苦しみに耐えかねて「拡大自殺」をはかった人間に対して、「死ぬなら独りで死ね」という声が澎湃として上がるのも、この日本型社会ボーダー・メカニズムのなせるワザだと考えてよいのではないのでしょうか。

ここで述べたことがらは、残念ながらあくまでも荒っぽい仮説の域をでません。しかしこのような人文系の分野でもボーダー学を発展させることは可能だと思いませんか。